

中臣被潤漁

七ヶ條御神歌共

完

413

927



113

927

四八一 13  
927  
卷

一神園之人生之常之信心

大正十五年二月  
花房仙丈御氏寄贈  
正義齋書

古事記傳  
大日本國山川草木萬物ノ始成產生  
乃大御神天照大御神月讀乃神乃始ノ神我  
大祖ノ神と奉  
也亦大祖ノ天照大御神乃親ノ同神也此云氏子之神  
伊弉諾神乃始生也萬國ノ御靈之難立於瑞穗ノ國  
主也中止ノ御子也舍乃根也云也乎也吐也齋也主也  
御也主也萬國也天姥也一命大御神ノ伊孫天神也主也安國  
主也主也一命大御神乃御國也又人也省日月也書也人也省日月  
也心也主也方心也主也西者敬也常也神乃中心也尚矣其  
文人也對也世種也事也也主也日也信也心也主也我身也主也

心中に私心をあ大事の母と信して第一とすらよて神明より御とし  
何事か通じやまといつてからざる信心もく母を往く家業ままで  
あん物とア放れも僅にモ信の心とく只難を取へずをとて  
手を致へども四神の御神事と天満宮と阿神事

心をも小誠の道よけいかくわが心も神や阿神  
とお神正直アカクよ處と重ねゆとゆく信心アキタニ神明  
乃加護有す有りとお神は難ミ神國よ坐と印恩の牛は能外  
一物アミ神のア第よ天満事と思は事よ信心あくべ人の道とモル  
ヤリモ也

一 腹と立物と告げて事

人の心を天監言事の神の立事取ば無やと據て立て神明の心  
育まて是物たとえと云め方やうも我心と角一人のみと御一心たう

トもす者こそア神と共舞する生ある物と又物と告げて事よの前乃哥  
とよのゆすく神明より立たる心の告げしとお神のア第よ背半  
傳アノミテ難とす科だまとの病と云うの因事と有病の者と  
神ア字ア通アノミ教育ひ熱ミ給ても神明の心我身も備ア有半  
成アシテはまく我心我身もまく有り、而我思ア新子年事  
と舊と立物と告げて事唯の事も神明より立事ア據の事すも告  
告げて事の内持ア難ミ事と云う事一生裏と告げて事有  
一己の傷心ヨム人を見ゆ事

已の身は我、沙と思ひく何事も我知らず我知らず居る事にて  
物アヨリ智あるは我單一と思ひ人を憂ふ事なれば。もとより畢竟  
ミシ節すと大道の少く生ずる事あらずと云うて數々善の書  
と舊文アテテ狼の善能と覺え、而も同の心の神明の心と同神

形事と悟るに及ばず、併の善物づく見ても必ず其の形事である  
者すく我の身と云ふ一物も形く天地の神万物と靈と同根同脉形事は我  
人を離さざる私心形く、深海の内皆アリ才氣すといたゞくりうる才氣  
多く成是れおとおと治方あらん形事よのこえとおとおと申すが舊心おある  
人なり而すよ

一人の悪事で、必ずする事

人の意を以て外は悪とす。之に貴子が帝靈廟おほたまにて事と考思ふ  
が、人の意と年ゆゑと習ふ物との心と少く、鏡のゆくの物とく  
善惡邪心も、萬物の神らしりゆくわくも、察めらしむる物とくに空氣、  
生心と考へば、じかに、私心と云ふ物なり。而して、是より生長の流すち、其の  
心續れ真裏に墨す。而して、考へば、其の心續れ、前形す。故に、其の物事は、疑  
ひ法くも、見えぬ。而して、あはば、是れ、其の事と考へて、今、焉に事斗す。

一垂病之時家業之不復重之者

我がよ忠心とゆく我おと考へのうを考へ誠に汝をもて神明  
の萬物と名へる事は神也と同神也すと志は忠と取す者不徳の者と  
思ひさへもいたりゆゑど己の忠心と增と重まひ方すと移けまこと  
考へ也

無病と家業ととぞ重き事

天地の開く。當日月二柱の大神。命おア苦勞せ。一往いと所難也  
と恩之育むひとゆれ。多き奉事。かく。と名を二柱の大神。アツキ事  
請く。萬物の靈長。かく。と。と。と。物す。ほ。神の心思。後の萬物と活  
育む。かく。万能。天主。我。家業。ゆきと。勤め。天より。乃。萬物と  
育む。育む。かく。と。心。勤め。ア。神。仰せ。叶ひ。我。為。天。乃。神  
望。早。生。持。家。運。繁榮。御。病。難。災。難。解。也。かく。忠。心。安樂  
ある事。致。也。

一誠の道は人間の誠である

世大道より者亦天聖王大ア神並直傳の大道より天壤の誠と人の誠と同一ツの心事とが一年の聖と神明印心の住せるの大道より天道より大道の難を教とあるも信ゆてよりや失ひせり。と時刻す心無か教よ限の我も人天理に思ふ及よ及ようやう事也。

一日一難を事とす事

ヨリ難を事ハ日月ニ柱の大ア神並直傳の天壤の誠と人の為す事物事事何ツも至る事無くあらんやうに羅拜

今上皇帝様より國方四聖公ア西遊を三々斧の御事と爲め  
エモル。モル。奪ふの如く父母妻子すま躬身尊仰。安らぐ事  
キテ是等の神相と御事より萬物の廣大を事と思ひてヨリ難を事

トモうは我が身更に身篤子の事迷ひ心と告げ出雲の神乃はを  
多く種の災難而苦心請え誠よ事とあはれ万能の心する物靈  
と云物と終り矣アシモノアハ天地神國主父母との難をも  
物靈長アリノよし小天塲の石國主と内正彦とて大巫女アハ  
リヨウ我身支の業事とす。何ツもおのづく自由自在のア代  
形事本却て廣大形の難を事と有む能事也。折半生事  
とて世のあるアの時事ひ惡いのと心言告。ひえ神明。命。靈  
たる心體の事。御。心。難。者。事。本。事。ア。シ。テ。冥。闇。の。如。苦。  
も無べ。若。三。言。ひ。ノ。神。明。の。大。道。難。方。事。と。道。す。事。モ。ト。終。作  
事。ヨ。ヨ。ア。廣。大。形。難。事。と。思。ひ。ア。ヒ。神。明。と。父。母。と。石。印。と。難。事。乃  
廣。大。形。難。事。と。ヨ。ア。ヒ。ヤ。モ。ル。ノ。道。ニ。見。と。生。ハ。富。教  
も。同。難。也。

右傳書志多以恐多之

左手の絆り口を當へ身を立たせ心の中と吟味して若し何事も有り  
せ思つて恐はすと宗憲大少神伊澤也の少神玉も誠より難う少神教  
多事也すと也爲め帝より命を給ひ

多事の心も従事する事と神でや思

はあも通す人乃心と申すが爲めの物をく十日が是ち所十九乃指  
さる所とまことに十人の眼と見つかるを勤めよてゆれ思ふあり人を  
も人乃立と思ひ者川うづき凌ひやう思者し我事大所侍主の御喜良  
の入欲と云ふよ引小引かくも省て侍く御大人の命のまある心  
稀に在する所と云ふ已ま兩り我所」たるすよ愛事、形まゝ道達タガ  
ひせ思つと又神川の印心す背きてて舌を出でて口へも思ひ合を姿

福は是れと云ふもの今世の人生立場と云ふ事也

續山人の志賀うら先生之義理の上を論ずる處

はるの如き者と手を取ると、かくもあはむと能ひて、我  
が一ノアリと思ひて神のや心の有る事へと唯人を神よりしていふも仰  
立ゆ。我那まよ事よ愚かす。歌うと吟味するが外情浮と云  
入心の事よ私心と思ひせぬこと吟味すると内情浮と云是ゆ極意也  
信くほき事と云ふ事も又、萬編物よ無く、至るの御心の御もと仰  
立ゆ。見よよ神よ宗憲大少神の誠ナ廣大也。冥加シ歎ア深也。能る  
義理伊弉諾也。

卷之三

志士不復以辭々一心之可無信焉謹而上狀

上卷

中臣祓潤源

卷之三

備前藤野保方波雅俊述

本文乃有二章傳國之始謀群神及太古稱先皇考之孫詔故別為第一章  
中臣姓之延喜式曰凡祭祀の祝詞御殿御門等ノ祭ニハ麻部氏祝詞以外ノ諸祭  
中臣氏祝詞四時ノ諸祭ヲ、よりテ神功ニシカ常例よりテ宣之其隨時の祭礼  
所司更ニナリテ修撰すと有モ二十四品ノ祝詞を撰ム此後中臣家に送  
と以て中臣の役の名あり吉田家に直接の役トテ是ヘキ亦全勢加首出雲  
大社等家よりは元モリテ已ミ雅俊ノ人モ其紀の儀ト案にあリム  
彼ハトニ神の尊仰諾任柴丹尊ト称モ天照大神の御世ヨリ至ヘ半隈  
ノ事モト御御治メト神武天皇御即位の时天照屋命の主天稚子命斯  
如クの文に併シテ奉ラモ瓊杵の尊の事ト云々達ラシ化の圖ニ

聖人と云ふ昔も古く前年の事の如きと文を傳へば仕厄と名う大聖像  
に生きていた道と能く史と刪り生てまくまくもあらび始くテ文我  
國に廣ひて後<sup>アフ</sup>神世の古事と記す文も彼の文字にて記し文のみ<sup>アラハ</sup>又彼國  
に似る事有<sup>アリ</sup>我もそんに乍諾住持等天聖天神とて彼の堺辻に  
テ御德と考<sup>スル</sup>其の自<sup>アリ</sup>仰まるをつゞくとぞや<sup>シテ</sup>思生義<sup>アリ</sup>又彼國  
載てや文を釋<sup>ト</sup>ちう拵候<sup>ト</sup>テ更<sup>アラハ</sup>神代<sup>ト</sup>解説<sup>ト</sup>書て波羅<sup>アラハ</sup>津母<sup>アラハ</sup>  
と刻す乍諾尊<sup>アラハ</sup>黃泉<sup>アラハ</sup>より歸り橋の下<sup>アリ</sup>とて自身の穢<sup>アリ</sup>を祓<sup>ム</sup>モ<sup>アリ</sup>素<sup>アラハ</sup>  
尊<sup>アラハ</sup>天聖天神と稱<sup>ト</sup>給<sup>ス</sup>と責<sup>ム</sup>了<sup>ス</sup>とつらひ<sup>シテ</sup>と<sup>ク</sup>又神武天皇  
の而<sup>アリ</sup>時天種子命解除天罰國討之支<sup>ト</sup>アリ古語拾遺に天皇御即位之時中臣氏  
人毒切を奉<sup>ス</sup>と<sup>ク</sup>今<sup>アリ</sup>如<sup>ク</sup>破<sup>ト</sup>瘞涌<sup>ス</sup>事<sup>ト</sup>思<sup>イ</sup>又仕哀天皇の古時國乃  
大幣<sup>アラハ</sup>と市<sup>アリ</sup>國の大破<sup>ト</sup>作<sup>ト</sup>と見<sup>テ</sup>此臣に考<sup>ス</sup>た神國の株<sup>ト</sup>五新羅の罪  
と責<sup>テ</sup>討<sup>ス</sup>如<sup>ク</sup>先君景行天皇の而<sup>アリ</sup>熊曾建<sup>ス</sup>入<sup>ス</sup>而<sup>アリ</sup>伏日也哉<sup>ト</sup>

て討<sup>シ</sup>し今又天皇<sup>アリ</sup>熊曾<sup>ト</sup>計<sup>ム</sup>香椎宮に至<sup>リ</sup>給<sup>ス</sup>と記<sup>ス</sup>に<sup>アリ</sup>  
新羅の罪と責<sup>ム</sup>に<sup>ト</sup>ああ<sup>アリ</sup>かよ<sup>アリ</sup>先年<sup>アリ</sup>伏<sup>ス</sup>と<sup>ク</sup>其根<sup>ト</sup>新羅  
に有<sup>アリ</sup>天皇是<sup>ト</sup>知<sup>リ</sup>給<sup>ス</sup>息長<sup>アラハ</sup>比賣<sup>アラハ</sup>神明<sup>ト</sup>言<sup>ス</sup>始<sup>ム</sup>告給<sup>ト</sup>と<sup>ク</sup>天皇  
伏<sup>ス</sup>計<sup>ム</sup>往<sup>ス</sup>且<sup>アリ</sup>アラ<sup>ス</sup>や<sup>ミ</sup>て兩<sup>ノ</sup>手<sup>ト</sup>是<sup>アリ</sup>失<sup>ス</sup>腹<sup>ト</sup>計<sup>ム</sup>  
て奪<sup>ス</sup>天皇の表<sup>ト</sup>而<sup>アリ</sup>后宮<sup>アリ</sup>甲冑<sup>ト</sup>帶<sup>ス</sup>大幣<sup>アラハ</sup>と取<sup>リ</sup>て<sup>アラハ</sup>心<sup>ト</sup>  
に<sup>ト</sup>討<sup>シ</sup>の<sup>ク</sup>果<sup>テ</sup>新羅<sup>ト</sup>功<sup>アリ</sup>記者<sup>アリ</sup>其事<sup>ト</sup>記<sup>ス</sup>神武天皇の事<sup>ト</sup>同<sup>ド</sup>  
く<sup>シ</sup>此<sup>アリ</sup>毒<sup>アリ</sup>拾<sup>ス</sup>邊<sup>アリ</sup>を以<sup>テ</sup>神<sup>アリ</sup>室<sup>ト</sup>に<sup>ク</sup>儀<sup>ス</sup>と<sup>ク</sup>の<sup>ク</sup>句<sup>ト</sup>よ<sup>ク</sup>天<sup>アリ</sup>座<sup>ム</sup>  
職<sup>アリ</sup>給<sup>ス</sup>所<sup>アリ</sup>太<sup>アリ</sup>に<sup>ク</sup>有<sup>ス</sup>一百七十万二千四百七十年金歲の世跡<sup>ト</sup>得<sup>ス</sup>小<sup>アリ</sup>毒<sup>アリ</sup>  
記<sup>ス</sup>セラ<sup>ス</sup>是<sup>ト</sup>種子命是<sup>ト</sup>奉<sup>ス</sup>て天位<sup>ト</sup>即<sup>ス</sup>ト<sup>ク</sup>又神代<sup>ト</sup>古事<sup>ト</sup>と<sup>ク</sup>  
天聖天神乍諾<sup>ト</sup>伏<sup>ス</sup>に<sup>ク</sup>集<sup>ム</sup>高天原<sup>アリ</sup>天<sup>アリ</sup>翁<sup>アリ</sup>翁<sup>アリ</sup>翁<sup>アリ</sup>翁<sup>アリ</sup>  
此<sup>アリ</sup>作<sup>ス</sup>上<sup>アリ</sup>乾靈國<sup>アリ</sup>と據<sup>ス</sup>御<sup>ス</sup>應<sup>ス</sup>ト<sup>ク</sup>皇孫<sup>アリ</sup>正<sup>ス</sup>心<sup>ト</sup>弘<sup>ス</sup>志<sup>アリ</sup>記<sup>ス</sup>也<sup>ト</sup>  
此<sup>アリ</sup>奉<sup>ス</sup>後天位<sup>ト</sup>次<sup>アリ</sup>宇摩志麻治命<sup>アリ</sup>坐<sup>ス</sup>無<sup>アリ</sup>内<sup>アリ</sup>物<sup>アリ</sup>也<sup>ト</sup>

之天皇の威儀と嚴壇一道臣命久等物那と仰せ宣門と舊り四等の間に天子の責  
と視せしもと記せり是て又天武天皇の時始く六月大祓行ひ給ひ見せり是  
又神武天皇の事と同くして始く後まほ説と置て祓のあらと考るに隼  
諾尊の支ノ修禊より素戔鳩命の事の難より神武天皇種子命の支  
ハ周の唐王即位太保禪の事に近し神功皇后の事の書の奉誓す近し天武天皇  
の支世にソノ祓の番り事アリテナシ御済に記す而の布文ハ通俗の折半に後  
て至儀名と用ひたる

高天原仁 神留坐須

たうまけゑに神アリ西アリ

是一篇の發端此後伊弉諾伊弉冉の子乎乎天照大神ノ伊位を讓をもふ  
まのゆと祀キ大神御名ハ大日靈貴又日神又天照大神とも号スル者高天  
原ノ天位て雲の上トニカ如一天の字あめと音ムカヒ蒼天のまこと

舊時天位て旧夏本紀の天祖と書いてあめのみなやとす天御中主と書いてあめ  
のみかみと書く別天八トと書いてそけあめ座くと書く瓊杵と書くと  
天饒國饒石天津彦火瓊杵と書くと書いてあめにきくとすめにきくとまつむと  
にきのと書く世神とあめのみけ日のこつけ皆蒼天の事と又正哉吾勝  
速日天押穗耳尊と書いてすくやあらのとやあまのとくわにのと書く天香  
若山命と書いてあまのく山のみと書天鉢賣命と書いてあまのうきめの命とす  
天兜屋命と書いてあまのこゑ御の命とすめ故とあまの事あまづ川とあま  
まのく天位或天御に川あるらのこ儒は形生と云て天と云い性生と云て乾と  
い主事と以て帝とあた合乎アリ神アリモアリますと至るたゞみくろに  
至る

皇親神漏岐 神漏美乃

すめあつ神あざ神あざみ

そのもつ神うき神うきと云ふ事に御子の故ゆゑの方事へ瓊々杵ヒタチを許す皇孫たるを  
以て備に大神の印孫ヒツジと一高皇產靈タカミシロヒノ靈尊リヨウズン押穗耳尊オハナヒコの外戚イクシキを以てすめ印孫ヒツジも之を  
又すめむすと號ヒメニて神うきヒタチハ言皇產靈神タカミシロヒノ神皇產靈タカミシロヒノと云ひテ之をすめ  
曰夏本記タカミシロヒノに於くに獨化母ヒメノ高皇產靈タカミシロヒノ並アリアリ恩薰太玉次タマヒカル神皇產靈タカミシロヒノ一ツツ津速  
魂次タマヒカル鬼屋命タマヒカル押穗耳尊オハナヒコに死マリセマリ持ハサウ瑞千姫タカミシロヒノ且シテツ大神タカミシロヒノと高皇產  
靈タカミシロヒノ世エラと同シテ是シテ加カスた女ヒメ鬼タマヒカル拘ハシム死マリセマリよ奉ハサウすよすりて解ハシムす止ムめシテ皇タカミシロヒノ  
すシテうきと刑ハシム天アメノのすシテ大神タカミシロヒノとすシテ親ハシムしむシテまシテこシテまシテよば  
紫シモツ萬年裝冊シモツブシタツすシテ手ハシム神タカミシロヒノ神タカミシロヒノ重シモツ國シモツクニ造シモツツバウ神タカミシロヒノ賀シモツハサウ初シモツハタマに高天タカミシロヒノの神王タカミシロヒノと有  
此類シモツ多く如シモツすシテ父母ヒメノとシモツうかシモツよシモツそシモツすシテ而シモツ名シモツとシモツすシテすシテうシモツかシモツすシテ命シモツ乎シモツ以シモツ天シモツ

みこと成シモツトシモツく

命乎以天

至シモツのア言葉シモツとみシモツりシモツア

八百萬神等シモツ神集シモツ仁シモツ集シモツ賜シモツ比

左シモツをよう川シモツの神シモツたちと神シモツあシモツめシモツよ集シモツたシモツまシモツシ

やシモツをよう川シモツ大シモツ被シモツにシモツ同シモツ一シモツ旧シモツ事シモツ本シモツ紀シモツにシモツ八十シモツ方シモツと記シモツすシテよシモツ多シモツ也シモツ十シモツ隈シモツ

也シモツとシモツ、シモツ日シモツ事シモツ本シモツ紀シモツ是シモツにシモツ近シモツ四方シモツの神シモツ詔シモツすシテ約シモツ矣シモツ

神議シモツ仁シモツ議シモツ賜シモツ天シモツ

神シモツもシモツにシモツもシモツりシモツ也シモツ

神シモツもシモツりシモツと云シモツ事シモツ二シモツ長シモツアシモツ一シモツノ農シモツ位シモツあシモツせシモツシシモツ下シモツハシモツ奇シモツカシモツの神シモツはシモツをシモツ也シモツ  
一シモツノ上シモツ天シモツ心シモツよ聞シモツて太シモツ古シモツにシモツもシモツ毎シモツ新シモツの世シモツ翁シモツくシモツゆシモツ也シモツ○シモツ旧シモツ事シモツ本シモツ紀シモツ曰シモツ天シモツ兜シモツ  
屋シモツ命シモツ主シモツ神シモツ事シモツ之シモツ宗シモツ源シモツ者シモツ也シモツ故シモツ使シモツ以シモツ大シモツ古シモツ之シモツ事シモツ而シモツ奉シモツ社シモツ焉シモツ○シモツ書シモツ洪シモツ范シモツ曰シモツ汝シモツ則シモツ有シモツ大シモツ疑シモツ  
謀シモツ及シモツ乃シモツ心シモツ謀シモツ及シモツ卿シモツ謀シモツ及シモツ度シモツ人シモツ謀シモツ及シモツ卜シモツ筮シモツ則シモツ從シモツ龜シモツ從シモツ筮シモツ後シモツ度シモツ民シモツ後シモツ是シモツ之シモツ謂シモツ大シモツ同シモツ身シモツ其シモツ康シモツ康シモツ子シモツ孫シモツ其シモツ逢シモツ吉シモツ合シモツ考シモツ也シモツ○シモツ文シモツ太シモツ古シモツにシモツ告シモツ太シモツ古シモツにシモツ受シモツ也シモツの言シモツ華シモツ也シモツ

吾皇御孫尊平波

あすめみまことのみふまとば

あすめみまことと大神をアシマツラノ讓位あるするは安井其諾等の印言葉之宣  
天子の事ニ天子トシモアリスアキトシ、自ムハ務等すめと宣ふ。青川  
ニ経の事ナリ諸君の印言葉に大神ハカリニ経の事ナリ族等と宣ふ。皇孫と正  
て天子と重々給ふの事ナリ。康誥曰王若日孟侯朕其弟小字封惟乃丕顯考  
文王克明德慎罰云武王天子にて第唐叔に衛國を封する。又斯のトク時諸君  
と相謀セテ。案す。に神代卷等天神七世と列序。一太神ハ伊弉諾伊弉冉等の字  
行く事に就て天子と知一食一歩、奉と祀。諾尊ハ惺根等の印子ナリ。事  
を載セテ正一ノ事。一ノす神主とモ一ノ記。ナシ。但毎知す。シテ。うらの  
事。日本書紀。墓疏。神皇正統記等の如き。神國の皇統と疑す。至。實明。安者  
妻孫と破る事あつ。シテ桓武天皇の西時焼捨セテ。也放ツシ事にあ。レ。刻

追世吳太伯と天並大神也と主張する者あり。播磨の赤松氏其兆と辨。妄視と破  
レハ实ニ國家の忠臣也。又案す。に旧本紀。神武天皇の紀詳にして。且長あつ。無  
大神の紀畧。ナリ。相穗耳瓊杵等に混。瓊杵尊養正と記セテ。養正之字。周易  
蒙の彖傳に見。ナリ。曰蒙以養正。聖功也。神武天皇にあつて。又曰。皇孫養正之  
心。而弘也。と厥ノ親王始て國史を撰。ナリ。而上世とちう事。いあつ。遠。ナリ。而  
之の書。ナリ。而。ナリ。之の事。ナリ。相穗耳瓊杵の間。唱うに記。養正。ナリ。而あつて  
詳畧。ナリ。之の如。ナリ。之の如。ナリ。日本書紀に至りて。又速日集と畧すとて知。し  
且一書に白と記。ナリ。之の如。ナリ。之の如。遺書。ナリ。之の如。ナリ。故。三書の体。と  
之。旧本紀。漢語と用。ハ微章。ナリ。而。瓊杵。養正。と記。應神天皇有聖  
表。矣。而。記。ナリ。是。其。迂。言。と。文。記。ナリ。大順。後。子。類。ナリ。○  
又案す。に押穗耳瓊杵の長子。速日。早世。ナリ。而。其。孫。宇麻志麻治  
命。大和國。有長臣長髓彦。神武天皇と義。ナリ。詳。載。ナリ。本邦の

地圖の開拓者

豐葦原乃水穗乃國於

とよあーとうかうんにかくの國と

てよ筆大とひてよさうのいぢれ事の如キ芦原日本中の古名傳説國の  
地を今に芦原國とひてあり天の浮く所のこう嶋鷦鷯の石碑古跡  
あり焉を三つともその類し芦原の祠の三モトとひよりて不  
とづくとは坂本家を後赤壁泥塑りの案すに當す芦原と云  
ト支々大倭日高見の國と云ふニモ接する時ハ海國主大倭<sup>アシカ</sup>芦薪織  
哉の中も引うた兵けわざを志すと、セハ海<sup>シマ</sup>ノ大洲<sup>シマ</sup>と並ぶ大ア世の  
國也。又ア大神既<sup>アリ</sup>は皇天に何んて大倭日高見國と改むる万國<sup>ミクニ</sup>は長  
大すの歴<sup>アリ</sup>す。全葉すに震旦臺夷海路万里通じて大日本の國と  
稱を蓋す此度<sup>アリ</sup>豊葦原の三つの國とヒテ文勢に至る太白吉

兆と得と知魚一。○神代卷曰此子光華明彩照徹於六合之内。○又曰當早送  
于天而授以天子事。○舜典曰重華恆于帝闕哲文明溫恭允塞玄德升聞乃命若  
安國登平ヶ久所知食登

をす、安基も國ノ征國とア大八洲の智是シテたつゆくと天也、廣大無物  
をもて四方迷惑ソクセキ行スル事モノ無ナシ也。此にすの功ノウムを難ハラフ一也。而ハてのせとく  
鎮地ジンジトヨトヨと之別にあ。京の國と仰アヒタシ大神降臨シマツリトハ、昭サクす。○明王ミヤウのモトと  
保ホウちもモホウの己シテと推シテく。よみやヨミヤノ其シテを紅レニと得シテ。○大學ダイガクにすも是シテを挈瓶ケツボウ  
之道トコトコ。○往シテ諾シテ尊天照大神ミタマタケミコト。信シテモ。又此言モノ人ヒト上アゲモ。是シテと咲ハナハ。先  
孰シテ其中シテとアシテ堯ヨウの一言モノ。耶ハ。

事依之奉幾如此依之奉志

ヨリハ往の宇佐國の事後ノと記してト文シ歎す

### 始視朝章第二

本文乃有去謹舉賢相上峻宇南面以聽臣下悅服之語故別為第二章  
國中仁荒振神達乎神向之向

々に中にある神たちと神とのとも

賜比神掃仁掃賜比天

給い神もろひにもらえ玉ひて

是より大神もろめて朝と視政事と執り行をす。事事に國中と蟄る  
伊而位の後先知の群臣官職を改め命をもとにあへて各其才能と携び  
ゆくあくから神と勇性と破るのを惡神の事と神もろに問ひ神掃  
にそもんをかまく三引毎一つの惡神と掃ひ退けむ。○舜典曰輯五  
瑞既月日觀四岳群牧

詔問止盤根樹乃立草乃垣葉乎毛詔止天天盤坐放乎天乃八重雲乎  
たててやしよ在すたち草のかまきることあめてあまの、もろ放ちあえ  
乍豆乃千別仁千別天

のへ重雲とい川けちま義にちまを

モキ一或ノ日こと言語もとひねての如くいはてて山の根本の根本  
幸いたち草の立のかる草にてとひとつまきて言語もとひとまかふと  
草木もろ至に本草より至し凶惡の人一あひひとと巧言令也。シカ  
葉の庄事もおぬりて言語とひとひの仕とよ、庄事も不善のひまかうと  
不賢くと追け給事斯のとく。○舜典難任人もとあまの岩くみのア  
八重雲を天の家の利たゞきを知る。アまの岩くみの天子の玉坐也あめの八重雲と  
蓑天て放ちてあら返すうちま義は道別といりが威稟であめの八重雲と  
いが世霧も自体のまをあつ天子も又有無の疑あつて連序あつ人の往

義き而唯大神りありて是とよく別伊豆のち玉きに道を云々のこ諱人釣  
に生とまひ居の耳目を暗す一遂に天下とくまえ事端まみの日と覆ふが如一世  
と僕らゆか身は第一の然う天の岩すまもちとく不賢くととむう追ひ  
あせの八重雲とい川のち玉きに手別く近く賢と举るに始め遠く天の運摩  
と必ずらのこ。堯曰客爾舜天之曆數在爾躬。

天降利依之奉幾如此依之奉志

何あくこまよかくまくよはくまく

上文に不賢くとももち賢志と舉る事と祥うよ記是其弦又う天  
くじうよかくまく賢者に職と仕へたまく

四方乃國中仁大倭日高見乃國乎安國登定奉互

るもの國中にも不賢まと日高見の國とあくあとまくのをまく

此臣百官任まくろて後土地と接て皇居とまくす文物と班ち禮と講

あくべ大洲のうちにもかく大倭日高見國と在る國と宣むるとあきハ冊塊  
に都と稱しゆ、幸文帝に見く大倭日高見國とす。幸大中臣家也に  
高日の國とあり日本書記景行紀濱成の天書第六延喜式六月大祓祝詞等皆  
日高見國とも風土記に常陸國信弓郡とす。雅後案す。に神代卷  
年號諸伴典等の條に先以疾路洲為胞意取不快故名之疾路洲延生天日  
本豊秋津洲次生伊与二名洲次生疏紫洲次雙生隱岐洲及佐渡洲次生越  
洲次生天洲次生吉備子洲由之起天洲之號焉即對馬壹岐及耶々小嶋皆潮  
未疑者矣此支神代にそと今並國に考るに疾路ハ今一國ニ伊与二  
名洲とす。の伊与唐瀬岐阿波四國ニ筑紫洲疏紫洲海東安佐毛後肥  
肥後薩摩大隅日向九國ニ隱岐佐ほる一國ニ越國。然る越布越後三國乎  
吉備子洲ハ備布の二名もさ岐對馬も又一國也甚大日平幸秋津ヨリハ今の  
畿内山陽山陰北陸東海東山の強造と兼て云々如一條の士例に比するに云

廣大にはよ大和國神武天皇より奈良に移すと教すり而テ大和浪美又、  
今之山城よりす玉羲の御子に神鑑不朽と察レヨリ乎也是にあはばや大奉  
例の本旧事也元に疾疫崎と生ニ為胞即謂吾耻也次に伊与二名例と生す以下  
日本書紀に同く唯大日本春秋律例と後にす二書の前後よりて考ク小田桑本紀  
古事記存レ日本書紀之文を備ム法よ適ふいと見る同書年號諸尊神  
功既畢靈運當遷县以構幽宮於疾路之洲寂然長隱者矣とあり又同國郡家と云  
而よ坐宮の古跡あけ西す今日蓮宗の寺あり其ノ年號諸の寺は故レヨリハ疾  
路洲にて大神よ至ア大和國よ御入大例皆宣教の名と襲て大倭高見國と号  
すと周の岐周よ起テ世の名と周としに合考スル古事記も又莊例の  
海子有日倭豐秋津清又名天御虛豐秋津別ニ是モ大和後モ名ノ川也  
まとシテ又証とすト且大神天の岩アヨ童子モ丹天香山の神也  
キモ神樂と奉一ト大和神代卷ヨミテ是又祐とすトの書洛誥曰

乙卯朝至于洛師我卜河朔黎水の如

下津盤根仁宮柱 太敷立千高天原仁千木高知互

乙卯朝至于洛師我卜河朔黎水の如一

履歴も文堯舜に似て書の十六相を舉け因と誅す。如以彼も四賢を舉けニ因と誅す。故よ書より聖人と証す。事多々凡神代の事有り如々又世が如て怪異奇変多々た。彼大日春伯の説あり垂加本居が流き神國と惑モ。一皇統と誣らる。余金す。所し旧事本紀神武天皇の條に曰。於古傍之檻原也。太立宮柱。於底盤之根。峻持搏風。於高天原而始馭天下。天皇の事と記す。もの既よくのか。此段も天豐大神衣裳と無事民と撫たる事。此卷末に掉唐のやうのこゝとゆうたてを表す。めせとやとまととめー。は後の照應。而臣合駢して優義す。神代の風紀考の筆力頗る。○論語曰無爲而治者。其舜也。與夫何為哉。荼已正南面而已矣。○易曰離也者明也。萬物相見。南方之卦也。聖人南面而聽天下。嚮明有蓋取諸離。

吾皇御孫尊乃夷頭乃御舍仁仕奉天。天乃御薦。日乃御薦。登應坐天。あり。止めみまつ。おきはるのみあらうに。ほんたてす。りまく。あめのこゝきはる。

うふとうくきはるて  
あうひ吾之卷初にあうすめみよて宣。と主客よ酒。先約の群臣上と親て曰我皇。の御孫す。とい。と。この間のこゝとハ禁嚴。あめのみ。け日のみ。けと。と。幸御鎮坐本紀に錦蓋覆日。纏曳天。御翳日。御翳屏奉行車。を。と。説あり。是又今の如く。任勢に。參り。せま。社司とも祭祀の儀と。さう。と文と。の。被に。重する。の。三世。後。まづ。神代。卷。よ。曰

次有神面足尊。惺根尊

亦曰吾屋惺根尊

亦曰忌檻城尊

一書曰此二神青檻根尊之子也

みそく大神皇室の正統に。且光華明彩照徹。於六合天上に升。一天の事と知り。且群臣心服のあまり。世殿は。うのみあらうに。餘余一階。かにつふ。幸天の覆す。如日めて。ひ。如。恩惠肺腑に。三利。と云。

○日の神天は岩戸に董り御た附會す。○治一の雅後ちアテム本朝の臣世と傳す。唐虞の尚るきあくす周とシモ子有俗年其間天下に君たる八百年也。嗚我天極大神無窮と基。シモハ實に富出た。凡人の君たるやの臣。トム心と心をめて咲。ト

在は國とたづけあう。めさし

安國登平ケ久所知食年

此段強す上文の言。奇す。か一命のまに治と敷。シニ五人を不仁と誅す。トモリ。

### 般上行罰章第三

本文乃有討天益人等之語故別為第三章。

國中仁成出年天乃益人等加過於犯氣牟雜々乃罪革咎利くに中よ奈列して。あまのまひ人等。乃西。まつとあう。色種。のつみ

奉咎たてま

國中。都。と。子。是。も。又。效。庭。て。か。り。い。て。も。ア。化。の。字。化。生。と。云。ま。く。ノ。の。意。ラ。筆。數。と。益。人。首。魁。と。舉。る。名。の。上。天。の。字。と。加。チ。ク。屬。上。く。し。あ。や。ま。う。過。失。し。人の。あ。き。に。あ。は。お。れ。順。き。と。ソ。あ。を。ま。ら。あ。は。事。を。く。是。と。遂。る。ゆ。て。愚。よ。同。一。罪。事。と。匂。と。切。て。そ。が。だ。ま。と。も。や。ま。罰。と。刑。の。社。家。人。と。生。民。の。如。き。も。附。舍。革。一。○書舜典象以典刑流宥五刑鞭作宫刑朴作教刑金作贖刑告災肆赦怙終賊刑。○案。ち。に。天。位。の。至。天。神。と。ソ。必。變。る。石。も。甚。か。に。脇。を。朝。と。視。る。財。が。先。達。と。去。り。賢。と。举。官。職。と。モ。う。上。席。と。入。て。王。宮。と。制。一。己。と。奉。して。或。臣。下。の。過。惡。と。誣。一。病。よ。在。て。經。界。と。慢。う。と。誅。して。天。刑。あ。又。國。禁。と。出。一。人。傷。ひ。財。を。賊。ふ。者。も。人。胡。久。羨。土。刑。母。子。不。孝。と。意。う。と。罪。て。人。倫。と。明。に。一。次。牛。馬。鷦。鷯。と。殺。す。と。罪。一。營。繫。等。の。災。害。と。戒。め。物。と。要。て。天。神。地。祇。と。未。捨。す。一。む。に。即。ミ。臣。職。を。第。

毛氏之終于丁未始終皆序于亂世

仁政章第四

本文乃有慢經界之刑謀。自人胡久美之惡母子不慈不孝及六畜之禁啓鑿等  
三災之戒。故別為第四章。

天津罪 登波畔 平放地 溝於埋樁於 放地 敷薪 串刺 生剥  
あまつみとへりともあちこそとうめをこもるちまきこまうせしゆ  
逆剥 許ク太久乃罪平 天津罪登波 法別天  
よきはうよもじてたくのりそをひまつまことくらまく

世臣すゝ田野の事よりて廣く百姓に施しゆる法令も亦是第一天工ともす  
罪と舉て責めり畔をもんぢ溝と埋め樋とよむち畔の田の徑界えど水道  
樋水口も因と放つ時穀祿不平水道と塞ぐ時温江とて穀不实水口  
を絶さきハ養人と左にて穀枯れぬ生きあきハ神代谷子重て種子と母と

列傳夷鳥寧天照大神のア田にたるる上に又前よりノリ御まゐらずを  
たゞよにまみて種と前とレド痘と前と時に時と先ふニ串刺又錦すとす  
うふくそと云號した道を失(るらひ)生剥(は)覆(ふ)に秋とあやまつしらうとま  
も又生剥(は)て製(せ)に法とあくまうもの(ひ)の辛(から)民の産(うぶ)を制(せい)す乃  
まくと仁政(じんぜい)の興(おこ)す是故(しこ)はあまの罪(つみ)とアラウハ宣(の)家  
國(くに)津(つ)罪(つみ)止(とど)か生(なま)乃(の)膚(は)断(だん)死(し)乃(の)膚(は)断(だん)白(しろ)人(じん)胡(ご)久(く)美(み) 己(み)加(か) 母(め)乎(ご)犯(つみ)世(せ)苗(なえ)罪(つみ)子(こ)登(の)母(め)登(の)犯(つみ)世(せ)苗(なえ)罪(つみ)

せりはまおはせう子をむすめのまことおとあくせう家子と母ともうせう家  
國に地こつゝ助君世臣シテ人ヒトとをすシテをとし田類タケニ家カミの御冊ウイツともに  
遷ハシムよみとよみとやぢヤヂの衣類イリと剣タケ刀タケをものとこちコチの財宝カイボと秘ヒて  
奪ハサムよもとよもと人の名翁メイウ久美う黨カミ世臣シテと仕ハシムよもとくクの慶ハシム人ヒト天スカイの益ヨシ人ヒト

に著て白人と上支りて草野田間の法を考へ度へう事推て無  
き人の説教たゞ社家白癡黒癡に付し又近世新羅人のまゝ仲哀  
天皇の記によきとも我主を被殺とすまほもたら盜賊を民を害す  
きの是より甚しきにかく盜賊をまかし民耕す事とをす因禁すりてひ  
くはむかのまゝ母を犯せり羅是も又母子淫事の説五行相對の説主とどくに因つ  
羅是まゝ母とソシテ又と兼るて故て我國風用所よはきて云らる多ナヒ  
唐日記のソリのもとこもヒヒソリ日記とちんあすけりヒヒ又和歌の題  
すも見る見月と書やぐも考ふべ一己の母を犯すソリも子の母に不孝ある  
と知るべ一己の子をもりてソドロムのあに不意する事多く有り又云母と子  
ともそぞる羅是と母とおもせり羅と丈とたゞいすて母を省略あると云せ  
○唐説曰矧惟不孝不友弗祇服厥父事大傷厥考心于父不能字厥子乃疾  
其子于弟弗念天頭乃弗克恭厥兄兄亦不念鞠字哀大不友于弟此語に

てよりて上世質実の國禁と知る。○舜典曰帝曰臯陶蠻夷猾夏寇賊宄  
汝作五刑有服五服三就五流有宅五宅三居惟明克允奉天子下旨○又曰帝曰契百姓不親  
五品不遜汝為司徒敬敷五教在寬

畜於犯世留罪 昆虫乃災 高津神乃災 高津鳥乃災 畜伏死  
ちくとおうせら罪もむの生きんむる津神のまことひたつ鳥の災けよ  
蓋物世留罪 許々太久乃罪乎出天牟

ちくとおみるも又上世より畜歎とす。まことに、妻妾を笑ひて畜と  
いふ事に拘り、所の多獸。牛馬鷄犬の類とし、人を愛して後物と愛して前物  
斯の如き孟軻齊の宣王にして、恩禽歎にありて、心て王たるに足らずと  
大舜の如く賢に居りて、民にむし民を愛して物もむし孟軻の宣王に  
まよひ牛馬鷄犬とすて生を育む民用と達するをこそかひ教

至々に律に曰殺畜産或傷其計減價準盜賊是也。虫の災以下三言造化鬼神の用と詔で少々懲せらる其道。至妙にてて要は側の極くやうやうのを唯大神のミ是とす。故より聖人すうて是を辨也。且三部書假者立言のをと明し後來神常有流の妄誕と至すニ。大神の道固より堯舜にニツカシ此篇又二典謨にモトテ至矣。今日人々に存し其跡皆皇家す。百官の考。亦國主聖の行。亦庶民の考。所詳り考あり。故より別て一卷とすけ。よのたゞ。す。のせ。罪是又圓禁して高め近づく。山壁の邊より身のみす。斯。かけら。な。と。之。歌。と。付。殺す。す。す。や。の。を。と。と。す。を。ま。す。も。う。く。人の。や。ま。い。と。い。を。す。よ。佛。す。か。い。今。の。あ。方。の。く。く。ハ。け。ら。に。木。鼈。子。を。こ。そ。せ。く。奉。殺す。と。易。日。中。辛。豚。魚。吉。豚。魚。ハ。ふ。く。と。レ。裏。し。聖。人の。誠。善。智。の。豚。魚。近。す。互。と。ソ。ア。大。神。の。ア。惠。ミ。又。野。山。に。す。め。ラ。鹿。猿。ナ。ス。ア。モ。シ。ト。ウ。天。の。ミ。ク。ガ。日。の。ミ。ク。ハ。と。ク。ル。マ。ジ。の。ミ。リ。シ。ト。タ。ク。ハ。お。や。く。ト。辛。事。を。脇。と。罪。と。あ。げ。

志せずと。

如此出天波

くもて、

キの法令と定とて四方の民。ふすう。じ是又ト文。と。奪。の。支。王。視。民。如。傷。ヒ  
ノ。う。如。ト。文。詳。す。ふ。と。

神德章第五

本文乃有宮中省視之語。蓋光華明彩照徹於六合之渊源也。故別為第五章。天津宮事乎以天。天廣金木乎本乎切末乎断互。あまり玄乎とぞつて。あまつ。ちあと。本。か。うち。まつ。おうち。たらて。あまつ。言。こと。宮中。の。玉。事。く。上。伝。に。レ。君。の。如。雪。玉。事。く。く。ち。て。と。レ。向。に。う。け。み。た。の。事。と。あ。ま。う。か。よ。う。ち。か。ま。う。ち。だ。ら。と。金。よ。形。と。本。ま。き。ま。た。す。と。あ。ヨ。川。言。事。天。津。宮。事。本。當。天。子。の。事。と。や。文。よ。考。す。と。

六月大祓に天津宮事。平以氏太中臣天津金采平本亦切もち断こありて太中臣  
トソニ三字とか。小書にニ字と不詳。大祓トソニヤの延喜の比金紀の為よ  
著作。古文にあらす事多。是を知る。

千坐乃置坐仁 置足波之天

ちくみ乃たまくにおひたゞめて

ちくみのたまくの神代卷より下の千坐置戸より。即曰諸神歸罪過  
指素鬼鳥尊而拜之以千坐置戸遂侵徵矣至使拔髮以贖其罪亦按其手  
足之爪贖之已而遂降鳥。まことに延喜式所取て神ぬの罰と贖ふに幣物と  
用ひの事。故に諸家の説皆同一。案すに上の素鬼鳥尊乃羅と礼  
たる折ちくみ置戸とあまからす戸ノ帝王政事と闡一念す所うそいは假す  
至すて宮中の懲私外廷の政事御神德の不思と元す。詩云维天之命於穆不  
已大神の穆とて不思ひホウクの如き乃きあまつ金あるかうらやもち断てち

きのあまくに重たゞしてとあまく彼の成法と金乎形乎ある刻え方に座右  
に重て三字をす。又字をソ。文勢どうにヤ文神祭戒の端ともこそア祀者  
の筆力簡す。て坐玄と食ミ海の不五所也。○書曰在璿璣玉衡齊七政。又  
案に良家曰良其背不獲其身行其庭不見其人。その背にしてするソウハの背  
ハ口腹のあき所口腹ハ身のゆてあす。シの良す。便きにそそぐて口腹とち  
もノ庭ハ赤の立所。犯瞻の地。庭に行て人の不善と不見正きにそそぐて不失  
之禮。神の行止易と相似。大神も口腹をまにあひ又人に接せざりに准すて  
人と大に異し自ら神ぬにす。また人し凡人から神ぬをまにあら接せざる  
者。其明と失ひ。人接せざる。人の不善とそ人に傷う。神明。三形事の私事  
有。形うちも無。如く天地とや徳と死。日月と其明と合。是故。幽暗の  
地とソミテ明不息とく。世海子及。ノ。草一本も遺さざる。

天神地祇來格章第六

本文乃有制祭服作祝辭之語故別為第六章

天津菅曾乎本苅立 本苅切豆八針仁取辟天

而まうとうそとをこら射たち本苅切て御川よりとどもさいて

是又書肆類于上帝禋于六宗望于山川歸于群神之事上文受て神と榮  
ゆふと云神代卷曰天照大神方織神衣居齊服殿一書釋日女尊云大神女牷  
して神衣と織玉とすのをもす子神衣と織め戒めのて天川  
もうちとゆうをたらおうきうて御川もくにそうきてと云神衣の事と神衣と  
んそと訓す論語に有明衣布<sup>スラス</sup>の類にく神ぬすする服と服と但一菅毛  
従るよハ化す澤清とソモニキ鳥尊清<sup>スカ</sup>の如く清<sup>スカ</sup>して宣<sup>スカ</sup>と同列<sup>スカ</sup>を  
もうとく疎進とソムシテハナスシ進<sup>スカ</sup>。

天津祝詞乃大祝詞乃事於宣礼如此宣羅波

而まつ内川とのやとの川との事とけきがくら

乃川とく神は告<sup>ス</sup>言事<sup>ス</sup>し祝詞祝辭傳詞<sup>ス</sup>も書<sup>ス</sup>りふとく川とくそんで云延喜式に  
多<sup>シ</sup>三<sup>ト</sup>大<sup>ト</sup>二<sup>ト</sup>二<sup>ト</sup>別<sup>ス</sup>事<sup>ス</sup>あ<sup>ス</sup>于吉田家に八重の傳<sup>ス</sup>り是<sup>ハ</sup>家の  
侍<sup>ス</sup>にて事<sup>ス</sup>あ<sup>ス</sup>す<sup>ス</sup>宣<sup>ス</sup>の字上文より戒<sup>ス</sup>と記<sup>ス</sup>事<sup>ス</sup>に<sup>ス</sup>祝文と從<sup>ス</sup>て天  
地山川と尊<sup>ス</sup>め<sup>ス</sup>と祀<sup>ス</sup>是<sup>ハ</sup>大嘗會の後<sup>ス</sup>也<sup>ト</sup>

天津神者 天磐戸於押開幾天乃八重雲乎任豆乃千別仁千別

而ま川神<sup>ス</sup>あまの岩戸<sup>ト</sup>た<sup>ス</sup>ち<sup>ス</sup>あ<sup>ス</sup>の尼<sup>ス</sup>雲<sup>ス</sup>とい<sup>ス</sup>のち<sup>ス</sup>ま<sup>ス</sup>に<sup>ス</sup>ち<sup>ス</sup>き

天所<sup>ス</sup>食<sup>ス</sup>牟

てきニ<sup>ス</sup>め<sup>ス</sup>ん

天津神ハ天神<sup>ス</sup>書類于上帝禋于六宗の事<sup>ス</sup>蓋津治已來の天神七世の先<sup>ス</sup>云  
か<sup>ス</sup>一<sup>ト</sup>天神とあま川から<sup>ス</sup>と云天神<sup>ス</sup>よりてソ<sup>ス</sup>あめの八重雲<sup>ス</sup>名譽天<sup>ス</sup>  
天には<sup>ス</sup>の神<sup>ス</sup>家<sup>ス</sup>祭<sup>ス</sup>す<sup>ス</sup>てあ括<sup>ス</sup>一<sup>ト</sup>あまの岩戸<sup>ス</sup>あまの岩戸<sup>ス</sup>に<sup>ス</sup>四<sup>ス</sup>  
国津神波高山乃末短山乃末仁登利坐天高山乃伊惠理 短山

又書望于山川編于群神の事之土地の神と祭りとし、高山、太山名嶽之香久山  
ウチヒ  
咲傍の卦あく、アリテニラ、山ハ小山也、峰も大和よハむか山あ、是をとつて、  
アリテニラ、遠き事也に乃やるとソシ、アリテニ延吉云に伊穗理アラ春意、  
穗の字未篇と脱すト、アリテ二説ともに得たるとも云て疑と闇て可也大やう

峯のうち生サオツヒ天神、降り地祇チヂミ、上ウエ空感スカクて夢ユメとシテす  
如此所聞食シテ天波罪止アマハシテ云罪ミタケ咎止アマガシテ云咎ミタケ波アマ不在アリ止スル

天神地祇カウヒ、事持ニツヒ、一毫も禍ハラハを、万福大神ミツヒの御身ミツヒにあつまり、天アメト其ヒ澤ハラハと彼カウヒうすらあす。其ヒ御文筆ミツヒの如シテ、また化す衆ヒトと川カワを咎ハラハと云ヒト。

ありと云奉文によりて社家に移祀の事とする。折主<sup>ハシモト</sup>廿段に文集の不収ニテ  
文に之<sup>ハシモト</sup>事<sup>ハシモト</sup>物<sup>ハシモト</sup>として賀奉る乃<sup>ハシモト</sup>  
科戸乃風乃天乃八重雲<sup>ハシモト</sup>吹放津事<sup>ハシモト</sup>乃如久

耶との風は天の風（雲）と吹きまつ事の如く  
世に、天つ神より、とて、返り歎美（奉）之日本書紀級長津彦級長戸ノ

世にうよつ神とよそを擇<sup>テツ</sup>ひし 称義<sup>セイギ</sup>もすゝ霧山川の霧氣<sup>アゲハガス</sup>云々深之渓谷  
みすゞ壁の云は<sup>ト</sup>テ<sup>テウ</sup> 紅風暮<sup>カク</sup>嵐の山川とあよむにたゞふ

大津乃邊仁居苗 大船乃舳綱 解放地 舢綱 解放豆 大海原仁  
於木乃へにあゝる大船のことを云ふとさすがち風つ素にて放ちて大海原

押放津事乃如久彼方屋繁木加本平燒鑊乃敏鑊於以豆手拂  
を一もあつまけて遠ちうもあきうやとをいまたくをうそをうそ  
事乃如久

うちもくふ事の下

又ニ長と合せて讚美ト幸ト大津火之とて無ハ分字山毛國巴苦に曰ト大  
津の(に)大舟と陸あきやるに駆亂と浮て船綱と放ち葦海は牛了びと  
又焼鑊の敏鑊とをいそよどき利鑊とひそむらに萬々たる樹木を灼  
かくをうやきとくらむとくのたるまも知れぬの數もくまとい  
そんあことどもうゆく舟かたる草木のとく遍行するに化すのと  
あたねきる所か天地化の妙もと大神にありて是とより  
遺礼田罪波不在止祓賜比清賜事拉  
乃と色るはまがあうとほくむたまひあよせたまふ事と

是上の句と終ミトの句とむすびて大神ノ神りあまいて自身に罪咎もて天ノ  
移ともうも済め却、西事あらんや天やの主として天地山川の神とま川ア満  
めの事と前す書と見て舜の事と明す如大神の名アシム又其変の鬼神  
を多々烹け慶と云天ト和平にて一人の罪人一つの五義アシム

四臣奏功章第七

本文乃有頬織津比咩氣言速秋津比咩氣吹戸主二公種德佐須良比咩加  
刑之詔蓋第二章所舉之賢也故別為第七章

高山乃末短山乃末此利佐久良谷仁落龍津速川乃頬仁坐須  
たう山のせあう山のホウリカク谷に落成つ速川の街にすゝはす勢あ  
頬織津比咩止云神

つむめこいの神

是より以下四臣德と稱く幸禹臯陶益稷の舜もあく如易曰王臣蹇々

非身之故也さうるが説あまき信一義一もくくを文すりて解らるのみ  
秋津姫アキツヒメが必ずて官とみたる海長擧の局或ノ勅言内辨ちの官と王命と  
史せらる者又事しの正官にあらん奉行と自分との邊いら姫アキツヒメ自身の如く文  
にうつたう山の木う山の木と大小の支としやかうるる各にあたまつま  
川の水よほよほと小の事一官にあつたる雨水の深さはあつまるにたゞ政夏  
こじく街の津姫アキツヒメによつてゆく

大海原仁持出奈年如此持出 那波

おなぬまにとらわへるのくらわへる

大海原ハ勤延アラシタマよたゞ西川の傍よ歸れるとくせちアキツヒメ一官にあつて鹽屋子  
荒塙アラカニ乃塙アラカニ八百道ハチヒヅシ乃八塙道ハチカニ乃塙アラカニ八百會ハチヒヅシに坐源 速用都比咩スヂウツミ登云神  
あら塙アラカニの志アリの面マスクとらけ身アリからちの塙アラカニの面マスクとあらけ身アリよそや秋津姫アキツヒメ三神

持可アリ年春天年如此可アリ年春豆波氣吹戸アシタマ仁坐源氣吹戸アシタマ主シテ登云神氣吹

をらう人乃人てんうく人乃人てけ吹戸アシタマに酒アサヒ次氣吹戸アシタマ主シテ小神氣吹

故五年

もくく

大海原アリにあら塙アラカニのとし、又あや秋津アキツをめとしん枕言葉アシタマを荒塙アラカニ  
塙アラカニの百道ハチヒヅシの座アリのと初アリと重稱アリてや社津姫アキツヒメとソトヨロ冷利アリとミテ  
姫アキツヒメも又人アリとて官名アリとアリ旧事本紀伊弉諾アキラヲ伊弉冉アキラヲ尊生國竟アリ更生神十  
柱ツバキ先生大事オコロナシ忍男神アキラヒ次生石土アシタマ昆古神アシタマ次生石渠アシタマ比賣アシタマ神アシタマ次生太アシタマ日別神アシタマ次生天アシタマ之吹上男  
神次生大屋比告神アシタマ次生妹速アシタマ秋津アシタマ姫アキツヒメ復速アシタマ秋津アシタマ彦速アシタマ妹津アシタマ姫アキツヒメ神因河海アシタマ特別生神八柱アシタマ  
秋津彦アシタマ神次生妹速アシタマ秋津アシタマ姫アキツヒメ復速アシタマ秋津アシタマ彦速アシタマ妹津アシタマ姫アキツヒメ神因河海アシタマ特別生神八柱アシタマ  
きアシタマ公官伴裴諾アシタマ伴冉アシタマ尊諸アシタマ國アシタマ時アシタマ而アシタマて置アシタマ事アシタマひアシタマて公官副官有  
と是アシタマ是アシタマ了アシタマ且アシタマの時國家の支度アシタマ新アシタマ如アシタマ大神アシタマの亞アシタマに至アシタマて速アシタマ秋津アシタマ姫アキツヒメ  
吹アシタマ大官アシタマと置アシタマて年アシタマ証アシタマと手アシタマに是アシタマ又アシタマ副属アシタマとアシタマ速アシタマ秋津アシタマ姫アキツヒメ

姫游海と司るやの三事もあひて司空へ別玉淨て洗毛清むと弟とすくんハ庄  
の家のへてへ仲の字尾仲往来息の游布す氣の盈篇の三日支本紀に吹拂之氣  
為神是謂風神号曰級長津彦神次級長ア邊神狀神吹拂之氣と同ら三事に於  
て司徒ニ風教と職する由之二臣玉化と種く奉風トリて是と御一瀬トテ是と  
洗ひ日夜翁言ひ本也是又禹実も歎うる所ノ如てん日本書紀に所  
の訓あまとも同訓にて別表

の刑あまくも同刑すて別矣  
如此氣吹放豆波根國底國仁坐須速左須良比咩登云神持左須良比咩  
えく奈波モおうて根の國廢の國す守使はせよ始より神うちまほり始より  
失豆牟如此失豆波遺礼苗罪止云罪咎止云咎波不在物止被賜比  
シテ今失毛モ詔毛墨とレ罪咎とレ科あらムモノと後毛給い清  
賜登申事乃由於八百萬神等諸共仁  
めあまよ幸はすと毛と毛の神たち共と毛

二臣徳と種き羞塙の洗から如く風ひ動けし如く畿内中國と被も清め吹放ち  
まほ服をさうらるぬまほ姫ももて刑を加へもさうら姫刑官ニモ重  
に放流され死刑に伏すまほ姫失ひてんと是ヘ狂世官も属官も下府  
持きほり姫と三櫻の國底の國は事本紀記素盞烏尊曰汝所行甚無  
賴故不可往於天上亦不可居芦原ナガツ中國宜急適於底根之国アマニとあまニ寄ニミト  
シニに行ひ、如又旧本紀日本書紀ともす出雲國ミヤク住むと祀一神孫  
今す西根の國と出雲國と云、如又旧本紀に考へ天アメニ上又芦原至中國より  
尔底根の國と云て是たず唯其國と云々尊の出雲ミヤク也す遠國あまた  
根の國と云出雲と根の國と云々根す是又の國に十華外夷との類を出雲  
又おののく同く云彼に夷と云ひあそびそゆきさくらのをあす我よ根の國と云  
爾そぞもあしれのをあす是共のうちのうちの國と云々也

率トキ文ソムラバ風水の官治とあひてもよし化さうらの遠國より  
是すう姫のあらう所也。大禹謨曰三旬苗民逆命益費于禹曰惟德動天無  
遠弗届。又曰七旬有苗格。仲尼曰善人為邦百年亦可以勝殘去殺矣誠哉  
是言也。

左男鹿乃八乃耳乎振立天闻食登申壽

シキトヘのへの而うとゆけたゞきく一めせと申壽

是も又大祓に向天至に耳垢たてきく一めせと馬牽立と耳の事有  
晦日のとこそへの耳とくま一馬を耳の瘡きおもむ鹿にひよけかくと  
詮家之疑むるす又社家より鹿春日大明神夢一ゆす處とソア考並  
旧事本紀顯宗記曰脚日本乃此傍山仁壯鹿乃角舉天吾舞ニミトテ壯  
鹿乃角とつまハツメ御耳ハツハ天子の數ニ方ニ四隅とすて八方  
中央と天子とす故ヨリ九ノ数の極て天子ハ位ヲ極し又皇居と九重とソヒ臣よハ

百乃奴ハ牛氏人ソレモ皇に八萬一トテ耳ハ座七兵合ヒア倍ヨリうく侍  
者ヒキテ四聰ヒ開くの事くすとすとソア奉禮記齊戒以告鬼神とあふを心  
と神ナヤ告ク又曰侍坐君子若者告者曰少間願有復也云々是ハ長者にゆ上  
くと云事シ論語復命曰寔不顧矣云々ア仲尼擴ミテ主國の君に携  
寔退て後國君に告シテ云々寔にまことソア復命シ第二章に天降り  
キア御の臣ち成功トヤ也。雅後謹案に天照大神の御徳ハ天地トナリ  
寔リヤ天児屋命志ナム奉仕シテ職は有ル本紀に云々ア明君と  
補佐シ臣節の基本ヒリトヨリ舊氏人臣の長ヒテ皇室ヒサシマク  
立チア孫種子命。神武天皇に佐ク歎セリテ即位の禮ヒ司リ此文ヒ作  
為レ大神の鴻業ヒテ天皇に永々忠誠の致す所ヒ孟軻曰冉牛閔子  
顏淵ハく徳行ヒソヒト種子命大神の世ヒ去事六世其年取ヒシ知  
愈ヨリトヨリ神徳ヒ述ヒ政事ヒ詔ヒ事詳にて且盡ヒ其賢ニ宗ナモ

之川原ノ柳神武天皇日向より發テ東征ノ大和國臥房の檣至シテ即位す。伊一神武と以て天トニ撫育ナシ。是ヒ人皇の始ト手ア子。繆清天皇也。學と繼ヒアシテ至若ヒ種子宇麻志麻治命等四七の補翼也。テノトサムシ六世編真た本朝の全書也。

中臣被潤源終

中臣被潤源跋

藤野保雅俊老彌年峻金之族堂也。近來中亞被潤源其意甚  
於闡此篇。尊慕仰懷。知我邦上古計量御極。續之矣。二  
典三洋齊生功化也。阮索多手遂成一。此所謂計量考源。生  
說考。至師承乃若此。翁之生於獨見。少人將年為狂妄。垂而棄  
之也。必參余。示告神學。生說安寔。囁其間。宋氏從之。今時  
見云。古人後學。且後生。由是以得。世篇之脉。旨以桂以達於唐  
虞。猶一之訓。此篇所主。及老亦將。至得於世也。黑修易皇極。三  
需天下。黑無二道。安始可與言耳。書成。活一脉於余。豈以世  
以舊。守峰。云。汝工於立說。諭於口益有得於活。遂云。潤源云  
天保庚寅十一月序。家儒吳。

萬波俊威撰并書

初章之歌

ト照キ神の御心人ひきとよす御世に生まし  
人乃身も當大神の言教取りて高め立すとお生れ  
ト照キ神と人共四年事ま神とさへ持  
キト而つて我主とすと神とゆすと神と一神  
ト照キ神の意をや深めん我主の玉と慶せ  
ト照キ神の意をゆく出でまくあきるにと爲りけ  
ト照キ神の言教と言教と志思人ともあらうと  
ト照キ神の御心と志人ともとて日と夜とに生ま  
河馬がふ雨あらまの立ち止まれば三歳の豆子と  
神とまつて一歳の豆子と今と年老とかくノ生  
豆子と我主の生とすひとて而歸ふとまゆ吹きとぬ

三の種乃ち入界の浮世の事とす。ようま  
市とび体とす。五体の母の中と生む。の  
て体のうちとをいひ宝と云ふ。いだく人のあらわき  
河本がま神の功德と云ひ知てす。かく書の墨掛の  
手本指北せし今も因とす。また書の事あるを  
日のやにゆく人の身筋が心うれし事の書少しけ  
我海をこみるにあつて。まことに本の體ア。あらわの  
疾う病てあつたと。草木とて。學と。神の儀の中  
も。の本音は底とと思ひす。庶て。きて。難う。耶  
草木本根の事。物を。あわと。月と。人の根。も。あ  
葉と。木の体。と。事。と。方。と。生。れ。る。ま。る。人。  
仰げ。ま。る。の。有。と。知。る。闇。あ。る。匪。ふ。く。の。ま。る。お。と。

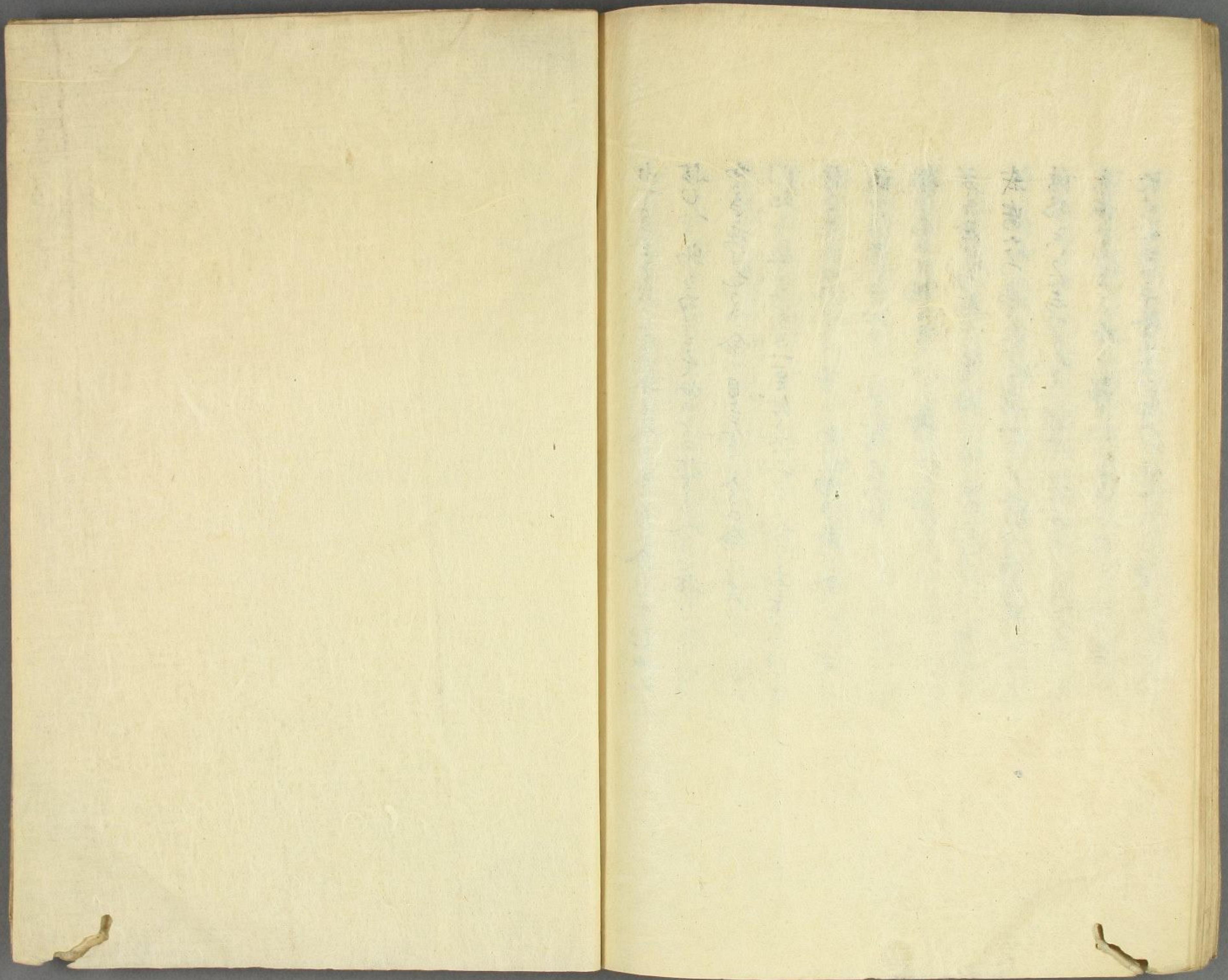
せまた。誰あませ。を。深。韋。に。こ。ひ。か。ま。と。を。取。る  
世の。ち。き。と。そ。ひ。持。る。我。の。傳。の。ゆ。か。く。う。う。う。  
玉。斧。の。道。の。傳。を。あ。ら。で。す。心。の。市。と。字。く。さ。う。く。な。や  
仁。と。義。と。需。よ。履。つ。と。義。傳。と。大。ま。（傳。の。中。も。あ。ま。）  
河。う。う。の。と。吹。ふ。ひ。う。あ。つ。う。あ。の。傳。の。あ。や。ま。と。  
深。と。闇。あ。り。い。う。あ。つ。う。あ。の。傳。の。あ。や。ま。と。  
我。も。い。ま。く。と。す。一。傳。の。傳。の。ゆ。か。く。う。う。う。  
う。あ。と。思。ふ。と。據。ま。と。き。ゆ。か。く。う。う。う。  
あ。や。か。と。や。あ。や。か。と。降。雪。の。暖。た。は。と。う。と。き。と。う。  
月。と。入。月。の。今。い。す。の。ゆ。か。と。我。と。道。の。う。一。歌。素。多。を  
日。と。入。日。と。今。い。す。あ。や。か。の。ゆ。我。と。道。の。う。一。歌。素。多。を

嘗てよき風流の事あり時とあつて  
坪てよ難波の風よ涼しきる春のむすめや  
今うなまく千乃歌すはゆめおはま今うの音う耶  
若竹我と我耶我すは思ひの大神よソヨシテウタ  
シテのちうらんとそすにうへかよたまふみのむ  
此の音うらんやちまくよをせよきの音う樂  
翁のゆうれいのうけが歌あそきるてはよ笑ふ歌の音  
雨音にうくよまくよをひきよ絃を飾る秋葉を  
有り物も皆詠拂へ大音のあくをかの聲歌う季  
我と我を抱き物も身一抱ひ我とテ一抱  
而まかだやかの日とよせう出く一抱う身を安ら

中音日とよだの音ひすくちかう歌の令けよやそん  
抱せす物もあそひのゆの抱うくまと抱せよ  
あまう歌はるゝ命の日とよき今之命もたまう  
門松を停まひう一里ほどおこりやう生簾ふね季  
落き木も吹付うてますあす弱き柳のぬく太鼓  
道よりたむすわだよおうきよ

根と志のて風うさう柳の柳う耶

まきをうわなうと神とよあたまくよおゆ  
我あたう歌にまく風うさうきよて風う歌う風  
波風ういたおう歌う風う波風う歌う人のう  
大海のあやううて風う歌う歌う風う歌う歌う  
たくもまくう歌う歌う歌う歌う歌う歌う歌う



早稻田大学図書館

011888006470